

早期変形性膝関節症の診断と治療

有病率の高い慢性疾患に対する疾病対策の基本は、早期診断と早期治療である。狭心症や心筋梗塞のリスク因子としての高血圧については、早期診断と早期治療が進んだことで、狭心症や心筋梗塞の発症率を低下させた。このようなことの積み重ねが、現在の本邦の超長寿社会の実現につながっている。この超長寿社会において、変形性膝関節症の有病率は、40歳以上の男性で42%、女性で62.4%、そして80歳以上の男性では50%を超え、女性では80%を超えている¹⁾。つまり、変形性膝関節症の有病率は、高血圧や糖尿病、そして高脂血症といったメタボリックシンドロームの代表的原因疾患の有病率よりも高いのである。

健康寿命の延伸という課題の解決には、運動器疾患対策が急務となっている。その一環としての変形性膝関節症に対しては、変性および摩耗し病態が進行した状態の関節軟骨を再生させることが、最も大切でかつ十分な対策なのであろうか？

われわれには、歴史から学ぶという知恵がある。変形性膝関節症の病態についての理解を深め、その病態に基づいた早期発見と早期からの対策や治療が、目指すべき方向性なのではないか？ その実現のためには、いま何が必要なのか。そしてわれわれはいま、何をしなくてはならないのか。私は昨今、このことを十分に考える必要があるように感じていた。

そんなことを考えている折、本誌が、近年世界的に注目が集まっている「早期変形性膝関節症」に注目し、「早期変形性膝関節症の診断と治療」という特集を組むということでお声がけいただいた。そこで、本領域の第一線で活躍されている若手研究者の方々（塩澤 淳先生、佐々木英嗣先生、赤城龍一郎先生、大関信武先生、定月 亮先生、太田 進先生、古賀 寛先生、阿漕孝治先生、大野真弘先生、金 栄智先生、乾 洋先生）に執筆をお願いした。

保存的であれ外科的であれ、優れた治療法か否かの鍵は「病態に則した治療」であるか否かに帰結する。変形性膝関節症対策の未来は、病態の理解が進み、それに則してより早期からの診断と治療が実現できるか否かにかかっているのではないか。

本特集に目を通していただいた読者は、変形性膝関節症のなかでも、特に「早期」に興味を持っていたいただいた方々だと思う。その中のごく一部の方だけでも、本特集に秘めた願いにまで思いを馳せていただき、少しでもその理解が進むことにつながれば、望外の喜びである。

（石島旨章）

[文献]

- 1) Yoshimura N et al : Prevalence of knee osteoarthritis, lumbar spondylosis, and osteoporosis in Japanese men and women ; the research on osteoarthritis/osteoporosis against disability study. J Bone Miner Metab 27 : 620—628, 2009